福生市立福生第六小学校　　NO.６１４　　令和６年３月１日

校報かめのこ

か　考える子
め　めげない子
の　伸びる子
こ　心豊かな子

福生六小ホームページ　http://fussa-6e.hs.fussa.school

本との（本当の）出会い

福生市立福生第六小学校
統括校長　　榎並　隆博

趣味は読書です。などと言うと自己紹介としてはインパクトがなさ過ぎて覚えてもらえそうにありませんが、私は本をよく読みます。とはいっても読むのはもっぱら通勤の行き帰りで、電車を待つ間や乗車しているときだけで、休日に家でお茶をしながらなんてことはありません。それでも電車を待つ間や乗車しているときに、たまたま読める本が手元に無いと、ものすごく損をした気分になるので、いつも残りページを見ながら読む本を切らさないように気を付けています。読むのはほとんどが推理小説です。以前は歴史小説が好きで、室町時代から明治維新辺りまでを歴史小説で読みつないだことがあります。

私が読書にはまるきっかけは、小学校５年生の時の担任との出会いです。萬屋（よろずや）先生という年配の男性で、私が５年生の時に異動してきて、２年間担任となりました。小太りで髪型は軽くパーマがかかった長髪です。見た目は音楽室に飾られたベートーベンのような先生でした。肩から薄汚れた鞄をかけ、本当は違うのでしょうが、毎日同じ服装でいるように見えました。そんな萬屋先生があるとき私たちと一緒に５０メートル走をしたら、とっても足が速くて驚きました。始めは見た目で少しマイナスのイメージをもっていたクラスメイトも、私を含め、いつの間にか萬屋先生のファンになっていました。

先生の国語の授業はとても楽しくて、気付くと１時間目から４時間目までずっと国語、なんていう日もありました。後から知ったのですが、萬屋先生は「日本児童文学者協会」というところに所属していて、新聞に連載記事を書かれていたこともあるそうです。そんな先生はよく私たちに「とにかく本を読みなさい。年間１００冊読みなさい。」とおっしゃいました。いつの間にか先生のファンになっていた私は、言われるがままに「年間１００冊」に挑戦しました。同じく「１００冊」を目指した友人たちは、やたら薄い本に手を出し始めましたので、あまのじゃくな私はあえて分厚い本に挑戦しました。「冒険者たち」「楽しい川辺」、本の厚さだけを頼りに選び、適当なものが無くなると「ドリトル先生」や「シャーロックホームズ」などシリーズものを読みました。「次郎物語」の１巻から５巻は、内容はほとんど記憶にないほど難しかったのですが、読み終えたときの達成感だけは忘れられません。ちなみにこの「次郎物語」、母校で教育実習をした際、懐かしくて手にしたら、２巻から５巻の貸し出しカードに、私の名前だけが書かれていました。卒業後およそ１０年間、私以外、誰もこの本を手にしなかったようです（１巻だけはトライされていたようで、貸し出しカードが新しくなっていました）。

結局５、６年生の２年間に「年間１００冊」は達成できませんでしたが、この時の萬屋先生との出会いが、今の私の日常につながっています。

大学１年生の時、児童文学の授業を受けました。教科書として購入した本は「日本児童文学者協会」発行のもので、その執筆者の一人が萬屋先生でした。数年ぶりに先生に手紙を書きました。先生からは「あなたのことは、よく覚えていますよ。」とお返事をいただき、子どものようにうれしくなりました。先生の姿を通して、私は教師になることを決めました。